

2019 年 A セメスターキャンパスアジアプログラム 報告書

2020 年 2 月

北京大学派遣 法学部 3 年 長谷川郁

1. はじめに

この報告書を書くにあたりキャンパス・アジアの先輩たちの報告書を読み込んでみると、多くの方が今後の派遣生に向けて丁寧に留学生活のイメージが伝わるように書いており、留学を終えた身として読んでみても先輩方の報告書が扱っていない面はほとんど無いように感じた。そこで、誠に勝手ながら本報告書は将来の自身に向けて書くことを主眼とし、留学生活を詳細に語ることもより将来見返したときに現時点での自身の認識や気づきができるように書いていきたい。そのため本稿で述べている留学生活は、自身の認識を少々強調した、一面的なものとなってしまっているかもしれないことをご容赦いただきたい。

2. 動機・前準備

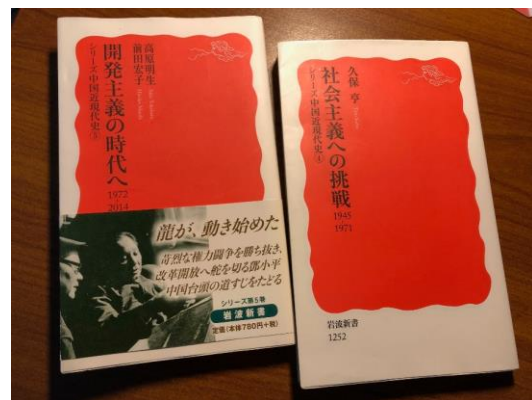
少しだけ動機について述べると、私は大学入学以前に中国について特別大きな関心を持っていたわけではなく、ただ「中国は巨大な隣国として日本にとって

切っても切れない関係にあるから」という漠然とした動機で入学後は第二外国語として中国語を選択した。しかし授業の延長線上にあった二年次のサマースクールで3週間ほど南京に訪れたこと、また一年・二年次に学生交流団体に参加し北京大学の学生と議論していく過程の中で、自身の持っていた「漠然として巨大で複雑な中国」のイメージでは捉え切れない多様で重層的な社会の存在を垣間見るがあった。これらを踏まえ、本留学ではなんとなく複雑な中国は実際にどう複雑でどのような面があるのか、それが総体としての「中国」という概念とどのように相互作用するかを知ることを目的とした。

前準備として行ったことは限られており、HSK 6級を受験する（渡航前は191点）、また中国人の友人とチャットをする程度であった。しかし今は事前準備をもっとすべきだったと後悔している。特に秋派遣の場合は渡航後一ヶ月くらいにサークル勧誘がありコミュニティが作られていくこと、またそもそも中国は北京でさえ中国語ができなければ生きていけない世界であることから、中国語はできるだけできるに越したことはない。そして、何よりも自身の場合は現地に渡航して「話す際には自信が必要だけど、初期ほど今までの勉強量しか自信になるものがない」ことを痛感した。私は大学入学後あまり本気で中国語に取り組ん

でこなかったことから自信を持って話すことができず、渡航してから「とりあえず話す→友人の正しい言葉を聞く→もっとうまく話す」の循環に入るまで二ヶ月ほど時間がかかってしまった。最終的には単語帳を作ったり添削を受けたりルームメイトと話したりすることを通じて少しずつ自信をつけていったが、自分がシャイな性格であると自覚する人ほど事前勉強の量で自信をつけていくことをお勧めしたい。

語学以外の面では、新中国成立後の歴史を概観する岩波新書の「シリーズ中国近現代史④・⑤」を読んでみてもいいかもしれない。特に改革開放は経済



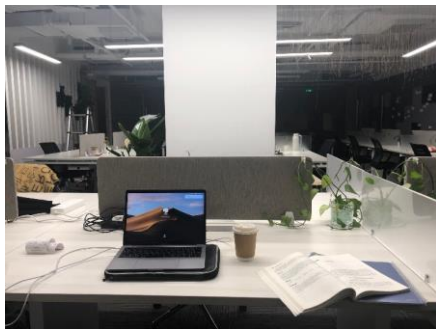
のみならず多くの分野における転機となっており、授業を受ける上でイメージがあると分かりやすくなるように感じた。

3. 授業

私にとって中国が複雑に感じた最大の要因は政治システムの複雑さであったことから、今学期は政治系を中心とした科目を受講した。具体的には中国政治概

論・中国から見た外交/国際関係・中国メディアと社会の三つの授業を受講した。

各授業の内容や気づきは次節に譲るが、全体としては東大での授業と比べ生徒と教授・TA との距離の近さを感じた。どの授業も初回に Wechat 内で教授も



試験直前にお世話になった 24 時間
営業の有料自習室。

参加するグループが作られ、グループ内では教授からは授業スライドや諸連絡が共有される一方で生徒からも内容に関する質問が積極的に行われていたのには驚いた。また 300~400 人ほど

の大人数では別時間帯に授業内容を復習した

り議論したりするセッションが設けられるなど、教授や TA、他の生徒と交流する機会が多かったのはとてもありがたかった。

学習環境としても北京大学はとても良く、国際関係学院の図書館・校舎内の空き教室/スペース・中関新園内の図書館・校内外のカフェ/有料の 24 時間自習スペースなど勉強スペースが充実しており、自室で勉強するのが苦手な自身にとっても勉強しやすかった。そして何よりも教室が寮から徒歩 10~15 分と大変近く、北京大自体が北京市の中心から少し外れたところにあり娯楽も比較的少なかったこともあって、勉強に集中しやすい、集中せざるを得ない環境であった。

ただ一つ気になった点としては時に教材・参考文献の「自活」を求められることがある。多くの場合それらがネットに「落ちている」ことにも驚いたが、海外文献などは vpn を通じて東大の GACoS から収集する必要があるなど、知的財産権に対する意識の差や学問の自由に対する制約をひしひしと感じた。

3.1 中国政治概論

中国政治概論は今学期履修した授業の中では唯一の中国語による講義であったため、レポート・グループ発表・中間/期末試験を乗り切るのがとても大変であった。特に 9 月・10 月は授業を聞き取ることもままならなかったが、幸い教科書の記述が充実しており、授業前に該当箇所を読み分らない単語をリストアップする、また授業の録音を数回聞き返すことなどを通して、最終的には 7~8 割ほど内容は聞き取れるようになったと思う。また教科書の各章に置かれていた練習問題(思考題)をルームメイトに添削してもらったおかげで論述も少しずつできるようになったので、この場を借りてルームメイトに本当に、本当に感謝したい。

講義の内容としては中国の政治システムを包括的に扱っており、具体的には

中国共産党の党内規律や政府との関係、人民代表大会制度・政治協商制度・国務院、政法（≡司法）システム、プロパガンダ体系、中央―地方関係、民族区域自治制度、政治と社会の関係など様々なテーマが解説された。しかし本講義では中国政治の最重要部分として中国共産党と中国政府の関係（党政体制）が常に意識されており、いずれのテーマも「中国共産党とその指導（领导）を受ける政府機関」という一貫した構図の下、共産党による指導がどのように制度化されているか、そして改革開放に伴う政治面での改革が実態としてどこまで進んでいるか、という二段階の構成となっていた。

私は中国の政治体制については「共産党主導の権威主義体制」という大まかなイメージしかなかったが、本授業で共産党―政府機関の関係という明確な軸があったことで、党組織と政府機関の重合や党幹部と政府機関幹部の兼職など、共産党による指導の中核となる複雑な政治過程を整理して理解することができた。特に授業で扱った部門別・レベル別の縦と横の統制（条块結合）と分税制改革に由来する中央―地方政府間の緊張関係は、2019 年末より発生している新型コロナウイルスの初期対応失敗の制度的な要因とも見ることができるなど、中国国内で発生する様々な社会問題を考察する際の制度面での前提知識を深められた

ことは大変有意義であった。またプロパガンダ体系などのセンシティブな話題に対しても、新旧メディアの統制や内参（敏感な情報を非公開にして党内で共有するシステム）に言及しており事前の想定よりは踏み込んだ内容になっていた。

一方で、やはり民族区域自治制度や国内の言論の自由に関するセンシティブな話題は議論が大きく制限されていた。そして実際に授業を受けていると価値判断を含む言説がどうしても耳につき、心の中で抗う気持ちが出てくることも度々あった。

また学習する上で、政党制・民主制などの概念の扱い方が東大で学ぶときと異なっており、これまで西洋で発達してきた研究の蓄積との接続が悪くなっているように感じた。例として中国の執政党と日本の執政党がその組織形態などにおいて異なることまでは紹介されるのだが、やはり中国を権威主義体制としてみなすことができないからなのか、中国共産党はヘゲモニー政党の一種ではなく中国に特異なものとしてまとめられてしまう。このような接続の悪さは「中国は特異（特色ある）なので、西洋とは異なる」「だから比較は難しい」というように意図的に議論を難しくしているのでは、と感じてしまうほどであった。

中国には中国なりのやり方があり、また改革開放以前に比べれば漸進的に政

治的な改革もなされてきた、という意見を耳にすることがある。本授業は制度的な知識を得るのみならず、逆説的にではあるがこの意見に対して「本当に独自のものなのか」「その改革はどこまで進んでいるのか、結局ただのガス抜きで終わるのではないか」という疑問を常に考えさせられ続けるものとなった。

3.2 本土視野下的中国外交与国际事务（中国から見た外交・国際政策）

本授業は英語で行われる少人数授業で、コーネル大学と共同開講されている授業ということもあり留学生が半分以上を占めていた。グループ発表・筆記試験・レポートによる成績評価であったが、何よりも毎週 80~120p ほど課される論文のリーディングが重く授業準備に苦勞した。

この授業では中華人民共和国成立後、新中国（特に改革開放後）が現在の国際秩序にどのように接し、組み込まれつつ、自身の国益を実現しようとしているのが解説されていた。具体的には国連の中での中国の活動、国際経済秩序（特に IMF、WB、WTO）と中国、米中関係、グローバルガバナンスのアクターとしての中国、地域統合・主権概念に対する中国の観点、一帯一路政策などが扱われている。このように見ると雑多であるが、全体として今まで国際政治上あまり活発

でなかった中国がどれほど、どのようにその影響力を行使し始めているか（韬光養晦→奮発有为への移行）という構図が常に意識されていたように思う。

中国で中国視点の国際関係を学ぶことはとても新鮮な体験であった。日本にとっての国際関係というどうしても欧米と中国・朝鮮半島・ロシア・東南アジアに力点が置かれるが、中国にとっては中央・西・南アジア、またアフリカにも同様の当事者意識が向けられており、例えば実体としてあまり機能していないものの権威主義国家どうしの交流による正統化装置としての役割が重視される上海協力機構が解説されるなど、今まで自身が国際政治として意識してこなかったものに触れる興味深い機会になった。また中国政治概論で学んだ内容との関連性も深く、中国国内の部門間・中央―地方間利益の対立が一带一路政策の統率を取りづらくしていることなど、国内政治過程と国際関係の組み合わせを見ることができた。

一方で、日々のリーディング課題が玉石混交なことになり辟易とした。上記のような興味深い考察を得られる文献もある一方で、特に中国の視点を理解するために紹介された中国国内の論文では「改革開放後の中国の平和的な外交姿勢は中華文明に根ざしている」などの不要な価値判断や根拠が曖昧な主張がし

ばしば散見された。対外的なプロパガンダであるにせよ、このような「論文」が実際に中国国内では通用してしまっている状況の不思議さや、中国の視点・論理を理解することの難しさ、自身の中での抵抗感を味わうことになった。

3.3 中国媒体与社会（中国メディアと社会）

本授業も英語開講の授業で、多くの生徒が留学生であった。課題はあまり多くなく、週に 30 ページほどのリーディングと授業内でのグループ発表、最終レポートにより評価される。

授業内容としては新中国成立後の中国メディアの発展を概観するもので、とくに改革開放後の「メディアの市場化」が中国国内の報道内容やその自由度、政府側の検閲キャパシティにどのように影響を与えているかを解説していた。メディアの範囲も従来の新聞・ラジオ・テレビから現在急速に発展しているインターネットメディアまで幅広く扱っており、地域間の情報格差からインターネットと人々の政治活動の関連性を読み解く研究や、不十分な市場化と政府による規制が構造的に腐敗を生み出していた状況を解説する参考文献も紹介された。

このように充実した内容はあったのだが、正直に言うと、この授業は今学期私

が受けた授業の中で一番残念なものであった。理由としては教授によるあまりにも強すぎる「中国視点」の押し付けであり、授業の内容に入る前に教授が香港のデモに関する持論を 30 分近く開陳したり、国内の民族政策に関する中国政府の対外宣伝動画を一コマ分見たりするなど、あまりにも稚拙で度が過ぎるプロパガンダが目前で展開されていて直視することができなかった。教授としては留学生に対して政府が漸進的に改革を進める姿勢を見せてその理解を求めようとしたのであろうが、極端な内容が目立ったためほとんどの留学生にはその思いが響いているようには見えなかったし、上記のような手法で理解が得られると心から思って講義をしている教授を見て、とても悲しくなった。

以上のように中国の政治を理解しようとして受講した本学期の三つの授業は、制度に関する知識や「中国の視点」を知る上では大変有意義であったものの、必然的に、しかし想像以上に政治色の強い内容であったため、正直に言うと辟易してしまった。これを踏まえて来学期は政治系の授業は取らずに経済や社会・文化に関わる授業を履修していただけない、新型コロナウイルスにより留学を継続できなくなってしまったことを大変残念に思う。あまりに政治色の強い授業を取

り続けると精神的に参ってくることもあるし、他に聴講した憲法学ではかなりレベルな授業が行われるなどもっとバランスの良い授業の取り方もできるはずなので、これから留学する方には他の報告書や学内掲示板（未明 BBS, P 大樹洞）などを参考にして履修する授業には十分注意してほしい。

4. 生活（寮生活、食事、交流、旅行）

生活面では、全体として奨学金が充実していたおかげで、かなりゆとりを持って暮らすことができた。



入寮時の様子。天井が高く広く感じた

2019 年 A セメスター派遣の場合、奨学金は中国政府からもらう形となっており、中関新園の寮費・保険代（800 元）の免除を受けた上で月 3000 元（5 万円弱ほど）が支給された。奨学生は中関新園内の 5 号楼・二人部屋で過ごすことが決められており、ルームメイトも勝手に寮側に決められてしまうが、私の場合はシンガポールからの本科生にあたり、とても運が良く、優しく綺麗好きな人に出会うことができ快適な寮生活となった。



学五食堂の牛肉咖喱飯、あっさりとしていてとても美味しい。

食事は食堂と外卖(出前)が中心であった。

食堂も校内によく行く場所だけで4、5箇所

あり、一食10~15元(150~250円)ほどとか

なり良心的な価格設定である。ただ食堂の

食事だけだと少しずつ飽きてくるので、週

に5~6回ほど出前も頼み、出前も20~30元ほどと高くないので、一日50元以

下で過ごす日がほとんどになっていた。

問題になるのは中国料理以外を食べたい時である。基本的に美味しくお洒落

なレストランは北京大学から一時間以上離れている地区にあるため(朝陽区)、

結局洋食を食べることは断念し、日本食は週に数回ほど自炊するようになった。

自炊の際はまずイトーヨーカドー(@恵

新西街南口)に調味料などを買い出しに行

き、食材は近くのスーパーにも通っていて

調達することがほとんどであったが、皮付

きの分厚い豚バラ肉や骨付きの鶏肉、鱈付

きのサーモンなど、肉や魚の売り方が日本と異なっており、なかなか調理に苦勞



した。しかし、やはり日本食は自分で作ると美味しく、作った料理をルームメイトや友人と一緒に食べるのはとても楽しかった。

気候は冬場になっていてもカラッとしていて、意外と寒く感じなかった。服も現地で数枚買ったが、Yシャツが 150~200 元（2400~3200 円）くらい。ただ乾燥対策は必須であり、加湿器を買う人もいたが自分は化粧水と大宝クリームで乗り切った。

携帯電話の通信料金は、毎月 30GB×12 ヶ月で驚愕のたったの 200 元。中国は世界一通信料が安いらしいのだが、まさかここまでだとは思わなかった。そして先述の通り vpn は娯楽だけではなく論文を集める時にも必要になってくるので生活に欠かせないものになっている。私はセカイ vpn を使ったが、国慶節の際は繋がりにくくなるなど、政治的に重要な時期は不安定になることもあった。

また健康管理のために、体育館内のプールを週に 2 回ほど利用していた。50m プールがあり、また深水部分は人も少なかったためとても快適だった。費用は 50 回利用で 460 元（7000 円程度）。

生活面で一番苦労したのが美容院通いであった。校内にも散髪屋はあるのだが、「最低限生きていける」程度のレベルらしく、私は怖くていけなかった。代

わりにキャンパスの南に歩いて 15 分程度の美容室に通っていたが、値段は一回 60 元 (1000 円) ほどで十分満足がいった。そして初めて行った時はうまく指示を伝えられず美容師さんと話すのにも苦労したが、通うごとに少しずつわかるようになり中国語のいいバロメーターになった。

これらを合わせると生活費は 2000 元弱になり、奨学金で月 3000 元貰うため旅行に数回いけるほどの余裕が毎月あった。このためバイトを他でする必要は全くなく、留学の規定としても禁止になっている。

しかし、空気汚染はやはり存在していた。北京は周辺の河北省の工業都市に比べればかなり綺麗な方なのだが、やはり平均的には東京の 2~3 倍は汚く元からあった鼻炎がじわじわと悪化した。また冬が近づくと起床直後や寝る前に咳が止まらない日もあり、数回ほどタクシーで 20 分ほどの場所にある日本語対応の病院に行くこともあった。ここは保険適用で診察が無料、そしてなんと毎回交通費が 200 元支給されるため、通えば通うほど自信が儲かる不思議なシステムになっている。

サークルは渡航前から反貧困協会に入ることを期待していたのだが、学内掲示板やオリエンテーションを見てもどこにも募集が見当たらず、参加すること

ができなかった。そのため北京大学の天文部に入るも、定例観測に数回行く程度でそこまで深くは関わることはなかった。現地学生とはむしろ授業のグループワーク等を通じて出会うことが多く、その他にルームメイトからの紹介や渡航前からの友人と関わるが多かった。



今回の中国留学で最も美味しかった料理は上海研修中に会った蟹ラーメン。

国内の旅行としては、元培学院の特別研修として上海に訪れることができた。二泊三日の短い期間であったが、全額無料であるだけでなく、康师傅という中国大手の飲

料・食品メーカーの本社や元培学院の名称

の由来となっている初代北京大学校長蔡元培の旧邸を訪問することができ、何よりも研修中に他の本科留学生と親しくなる素晴らしい機会であった。本研修を受けられたことだけでもキャンパス・アジアとして留学した価値があったと思うし、企画してくださった元培学院の先生方に心より感謝申し上げたい。

その他の旅行としては個人で内モンゴルと天津・山海関、また友人とハルビンに行くことがあった。その際旅行先の名所・旧跡を見ることはもちろん楽しかったのだが、旅行先に行くまでの列車や飛行機で偶然出会った人々との会話が何よりも忘れられないものになった。山海関から天津に向かう際に乗った列車で

は隣に乗り合わせたおじさんが石炭関係の仕事で唐山から一日かけて広州に向かっていたようで、おじさんにヒマワリの種を分けてもらいつつ、空気汚染対策として職場が度々止められてしまうこと、子供に



旅行でよく利用した緑色の客車

いい大学に行って欲しいことなどを話してもらった。またハルビンからの寝台列車では帰省中の小学校の先生とその可愛い娘さんが下の寝台におり、帰国する飛行機の中では日本に住む息子さんに会いに行く北京市内でモーター工場を営んでいるおじさんに会おうなど、北京大学では会うことのできない様々な人と話し、彼らの生活を覗かせてもらったことは何にもまさる貴重な経験になった。たどたどしい中国語でも、日本から来てくれたと優しく話しかけてくれた多くの人たちに本当に感謝したい。

5. 終わりに

今回の留学は「なんとなく複雑な中国は実際にどう複雑なのか」という目的に対して、少なくとも政治の面では履修した授業を通じて一定程度その制度や行動規範、論理を知ることができたが、同時に自身の中で強い抵抗感を感じるものでもあり、中国の「怖さ」を身をもって経験することになった。一方で、留学中に会った大学内外の人々たちを通じて、今までの自分の中にとってはただの省や職業などの名前だったものに少しずつ李さん、何さんといった知り合った人たちが結びつき、大雑把な「中国」に内包される様々な要素が自身にとって親しく感じる不思議な感覚を味わうようにもなった。

来学期は経済、社会など異なる面に注目し、またより多くの人と会うことを期待していただけに、新型コロナウイルスによって留学が中止となってしまったことは大変残念である。それでも、本学期に学習した内容や中国語自体、そして出会うことができた人々は、「中国を知る」という絶え間ない過程と向き合う今後の自身にとって大きな助けとなっていくこと確信している。

最後に、今回の留学を支えてくださった先生方や EALAI の方々、また北京大

学の方々に心から感謝申し上げたい。